

## ピリピ人への手紙2章12-30節 「キリストの思いの実践」

### 1A 従順な生活 12-18

1B 救いの達成 12-13

2B 傷のない神の子 14-16

3B 注ぎの供え物 17-18

### 2A 心配している心 19-30

1B テモテにある同じ心 19-24

2B エパフロデイトにある慕う心 25-30

## 本文

ピリピ人への手紙 2 章の後半ですが、この手紙の流れを思い出していきたいと思います。パウロは、今ローマの牢にいます。けれども、これまでもそうだったように、ピリピの人たちは彼に贈り物をおくりました。それで感謝の思いを伝え、また、教会の中にある意見の対立の問題を取り上げています。

ピリピの人たちも、パウロと同じように苦しみにあっていました。苦しみや圧迫を受けている中で、おそらく、「どうして、このようなことが起こっているのか？」という思いが強くなり、こうすべきだ、ああすべきだという意見が出てきたのでしょう。そして、「こんなことしているからいけないのだ」「いや、そうではない。あなたのようなことをしているから、こうなっているのだ。」と、原因探しをしたり、責め合ったりしていたのかもしれませんが、これが、苦しみを受けていたり、何かうまくいっていない時の罨です。原因探しをするのです。しかし、パウロは、1 章 29 節で、「あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。」と言いました。苦しみを受けている、うまくいっていないというところにも、実は、恵みがあり、神からの賜物なのだということなのです。

そこで彼は、一つになって戦うことを勧めます。一つ思いになることを勧めます。一つになるためには、へりくだりが必要です。それが 2 章です。互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい、と言っています。そして、自分のことだけでなく、他の人たちのこともかえりみなさいと勧めました。そこで、パウロは、へりくだりの模範として「キリストの思い」を抱きなさいと勧めるのです(2:5)。6 節から 11 節までに、キリストが神の栄光から離れて人の姿になり、十字架にまでご自身を従わせた。それゆえ神がこの方を引き上げて、すべての名にまさる名を与えられ、そして、すべての者が、「イエス・キリストは主です」と告白します。これは、初代教会での讚美歌だったのかもしれないと言われている箇所です。このキリストの、へりくだりをあなたがたも抱きなさいと勧めています。

## 1A 従順な生活 12-18

そこで2章の後半部分、12節以降は、ここに示されているキリストの思いを、へりくだりをどのように私たちが適用していくのか？ということについて、パウロはさらに掘り下げていきます。私たちに、どのようにキリストの思いが反映されるのか？ということです。

## 1B 救いの達成 12-13

<sup>12</sup> こういうわけですから、愛する者たち、あなたがたがいつも従順であったように、私がともにいるときだけでなく、私がない今はなおさら従順になり、恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。<sup>13</sup> 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。

この箇所を午前礼拝で、じっくりと見ました。キリストの思いが私たちに反映されるには、「従順」になるということでした。すでに、神の救いの働きがあります。神が良い働きを、彼らの間で始めておられました。それを、キリスト・イエスの日までに完成させてくださるのです。そのことに、従順でありなさい、ということです。神は、私たちの内で御霊によって働かれる方です。私たちの志に働きかけます。そして、私たちがその志を成し遂げることによって、事を行われます。私たちを傍観者にせず、当事者にさせるのです。それが、神の救いというものが何であるかを、周囲の人々に証しして行くのです。

ある牧師さんが、日本の教会は、「天国教」あるいは「地獄教」になっている傾向があると言っていました。つまり、誰かが信じて天国に行くことだけに気にしています。まだ、自分のお婆さんがイエス様を信じていない、というような会話です。あるいは、地獄から救われていることだけを考えて伝道していると。もちろん、永遠のいのちの希望は大事ですが、その間がないがしろにされているということです。救いというのは、私たちが信じた時に保障として与えられますが、神がキリストの似姿に私たちを変えていかれて、私たちによって神の栄光が現れることを指しています。今の私たちが、神の救いの証しなのです。

そして、パウロは、救いの達成のために努めなさいと言っている時に、ピリピの人たち全体に語っています。救いというのが、個人の救いではなく、彼らの共同体の中にある救いなのです。これも、ものすごく大事です。私たちは個々人が救われるのではないのでしょうか？と思うでしょう。もちろん、各々が神の前に申し開きしますから、その通りなのです。でも、救いというのが、神の似姿に回復するものであれば、それは父、子、聖霊の交わりの中にある姿です。そこに、一つになっているというものが含まれているのです。ですから、私たちが共同で、一つになっていて良い働きをしているというのが、神の救いの現れなのです。

ですから、自分が、いわゆる、礼拝の時間だけ出て、その後すぐに帰って、他の信者たちと関わ

りを持っていないのであれば、神の救いの躍動した姿に、まだきちんと入っていない、ということになります。私たちの全ての関わり、教会における奉仕から、祈り合うこと、助け合うこと、互いに語り、励ますこと、それらが神への礼拝であり、そして神の救いの達成なのです。

## 2B 傷のない神の子 14-16

<sup>14</sup> すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。<sup>15</sup> それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代のただ中であって傷のない神の子どもとなり、<sup>16a</sup> いのちのこばをしっかりと握り、彼らの間で世の光として輝くためです。

パウロは今、ピリピの人たちを礼拝から従順へ、従順から、世に対する証しへと彼らを導いています。キリストの受肉から十字架までの道、そして復活から天に昇られるところまでを教え、そこで礼拝に導きました。礼拝に導かれた者たちは、そこでキリストの思いがすでに与えられています。それを実践するのです。従順になります。それから、自分たちの中に留めておくのではなく、人々の中に証しを立てるのです。これが、ここ 14 節から 16 節までにパウロが書いていることです。イエス様が、「あなたがたは世の光です。」と言われましたね(マタイ 5:14)。その目的は、暗闇に光を照らすためです。中に隠すためではありません。

世の光に関連して、二つの極端がキリスト者にあります。一つは、懐中電灯のようなキリスト者です。わざわざ、世の悪に照準を合わせてそこだけを照らすことです。「今は、主にあって光となりました。」とエペソ書にありますが(5:8)、あなた自身が光であって、あなたが光の中に生きていれば、自ずと闇が明らかにされていきます。神社仏閣があつて、わざわざ、そこにいって、「あなたがたは偶像礼拝をしています。地獄に堕ちますよ。」と言わなくていいのです。初詣を責めるのではなく、私たちが元旦礼拝を献げるだけでいいのです。こうやって、まことの神を証します。

もう一つの極端は、隠してしまうことです。イエス様が「明かりをともして升の下に置いたりはしません。」と言われましたが(マタ 6:15)、私たちが教会の中だけで、自分のキリストの信仰を表明したところで、光の役割を果たしていません。そうではなく、世にあって生きるのです。世から離れて生きることが私たちの召しではないです。キリストが神であられるのに人となられたように、父なる神から遣わされたように、私たちは今、それぞれがいるところに遣わされています。そして、そこでキリスト者であることを証しするのです。教会は教会、家庭は家庭と分けてはいけません。教会は教会、職場は職場と分けてはいけません。すべてが主を証しする現場です。

ですから私たちが、バイブルカフェを行うこともそうですし、今は、終活から、イエス様の証しを立てることを教会の活動として行っています。それは、一般の方々との接点を持つためです。社会で孤独な人が多い中で、教会にある一致を見たら、どれほど驚くことでしょうか？

まず、「すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。」と戒めていますね。これは、ピリピの教会の中で起こっていたからこそ、それを言及しているのだと思います。教会の中で、不平を言っている人たちがいました。また疑いをかけて争っている人がいました。(この「疑い」は「争い」と訳すことのできるギリシア語です。)イスラエルの民が、不平と疑いや争いをかけて、滅んでしまいましたね。それでは、救いの達成に妨げとなってしまいます。世の中は、いやになるほど、不平と疑い、争いが多いです。それで、いかに自分が正しいかを前提にして、他の人について、教会について不平を言い、争いがあったら、世と何が違うのでしょうか？

そして、「非難されるところのない純真な者」と言っています。人々が普通に見て、世の中と同じことが起こっていたら非難されてしまいます。そうではなく、純真な者となるということです。つまり裏表がないことです。主をほめよ、といいながら、同じ舌で兄弟の悪口を言っているなら、それは偽り、偽善、二重舌です。信仰の表明と、実際との間に違いがないのが純真だということです。

「曲がった邪悪な世代のただ中であって」とありますね。イエス様は福音書でも、その時代が曲がった邪悪な世代ということを言われましたが、今もそうですね。しかし、それを私たちは否定的に捉えなくてよいのです。曲がった邪悪な世代だからこそ、光として輝く機会が増えてきます。例えば、今は孤独な社会だからこそ、私たちが愛の交わりを持っていること自体が、この共同体がますます光として輝くのです。

「傷のない神の子ども」とパウロは言っていますが、傷のないというのは、害を与えないという名意味合いがあります。つまり、争ってかみ合って傷をつけるのではなく、ということです。そして「神の子ども」というのは、父に似た者ということです。父が善人にも悪人にも太陽の光を下さるように、私たちが子として、敵であっても愛するということです。

そして、「いのちのことばをしっかり握る」とありますね。世において、人々が罪の中で死んでいる仲でも、いのちのことばを握っています。ペテロや他の弟子たちは、大勢の人がつまずいてイエス様から離れた時に、それでも、「ヨハネ 6:68 主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」と言いました。そして、この、しっかり握るといのは、教会の中だけでなく、世においてもしっかり握っているということです。ですから、前に付き出して掲げている感じですね。

そうしたら、「彼らの間で世の光として輝く」とあります。ここでパウロは、ダニエル書 12 章 3 節にある、人々を義としていく者たちが輝いている預言を念頭に入れているのかもしれませんが。「賢明な者たちは大空の輝きのように輝き、多くの者を義に導いた者は、世々限りなく、星ようになる。」私たち人間はどうしても、花火のようなものに目が引かれます。どうしても、地味に輝いているのには目を留めないでしょう。けれども、どちらが優れているのでしょうか？はかない花火のような輝き

でしょうか、それとも、いつまでも星のように輝いていることでしょうか？キリスト者は後者ですね。どんなに地味に見えても、世の光こそが人々に益をもたらします。

<sup>16b</sup> そうすれば、私は自分の努力したことが無駄ではなく、労苦したことも無駄でなかったことを、キリストの日に誇ることができます。

パウロは、キリスト・イエスの日までに、彼らの間での神の良い働きが完成することを確信していましたね。彼は、その時のことを思って、ずっと語っていました。その時に、もしや、彼らが不平をいって、言い争いをしているのであれば、その良い働きが妨げられてしまうことになり、彼らを育て養うために努力したこと、労苦したことが無駄になってしまいます。そうではなく、彼らが従順であれば、神を恐れて、自分がいなくても彼らがますます、みことばによって恐れを抱いて、それでますます従順であれば、自分の労苦が主の前で報われる、ということですね。

### 3B 注ぎの供え物 17-18

<sup>17</sup> たとえ私が、あなたがたの信仰の礼拝といういけにえに添えられる、注ぎのささげ物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます。<sup>18</sup> 同じように、あなたがたも喜んでください。私とともに喜んでください。

パウロは、これら諸々のことを、「信仰の礼拝」とみなしていますね。私たちが、ピリピの人たちの信仰の歩み、その教会の歩みが信仰の礼拝だと言っているのです。私たちも、すべてのことが主に献げる礼拝であるとみなすのがよいでしょう。

そして、そこに、「注ぎのささげ物」と言っています。これは、律法の中に、動物のいけにえと共に、ぶどう酒を献げる、注ぎのささげ物があります。また異教の儀式でも同じようなことを行ったそうです。これは、いのちを注ぐという意味合いがあります。パウロは、ここでは死刑になりませんでした。二度目にローマで牢に入れられた時は、殉教しました。その直前に書いたのが第二テモテです。そこで、「4:6 私はすでに注ぎのささげ物となっています。私が世を去る時が来ました。」と言っています。パウロは今、キリストの日のことを語ったので、自分自身の終わりが、この日の前にやってくるかもしれないと思ったのかもしれませんが。

パウロの死生観が明確に現れていますね。たとえ、信仰のゆえに死んだとしても、喜んでください。ともに喜んでくださいとお願いしています。なぜなら、信仰の礼拝のいけにえに彼らになっているからです。その実が結ばれているのであればもう後悔はない、残りは、主と共にいることになるからだということです。すでに、世を去ることが、はるかに望ましいと言っていましたね(1:23)。

キリスト者の死生観は、これが根底にあります。キリスト者の葬儀が、仏式などの葬儀と違うの

は、ここです。死ぬということは、私たちの恋い慕う方と共にいることであり、また復活するという希望があるということです。残された者たちのほうが、大変ですから。牧者チャックも言っていました、「新聞の見出しで、チャックは死んだ、と出ているのは信じないでください。それは誤報です。チャックは、引っ越したというのが正確です。」ということです。古い着物であるこの肉体が減んでも、新しい着物、天からの栄光のからだを受け取ります。

## 2A 心配している心 19-30

ここまでが、パウロがピリピの人たちに、へりくだりの心をキリストの模範から示してきたものです。けれども、実はまだ続きます。パウロの下には今、捕らえられている彼に仕えている人が二人います。テモテとエパフロデイトです。彼らをピリピの教会の人たちに送りたい思いをパウロは伝えます。この二人にも、キリストの思いを抱いて、従順になり、へりくだった心を持っていることを知ります。

## 1B テモテにある同じ心 19-24

<sup>19</sup> 私は早くテモテをあなたがたのところに送りたいと、主イエスにあって望んでいます。あなたがたのことを知って、励ましを受けるためです。

パウロは今、自分が注ぎの供え物になると言っていました。それは可能性であって、24 節を見ると、釈放されて彼らに会いに行けると確信しています。けれども、すぐには釈放されるわけではないことも分かっていました。それで、パウロは代わりにテモテを送ることにしました。ピリピの人たちのことで、励ましを受けたいからです。パウロと彼らには友としてのつながりがありました。友は互いに会いたいと願います。パウロが一方向的に指導して、与えるのではなく、パウロが御霊の賜物を分け与えることによって、自分も霊的に受けることができるのです。

しかし、単に友ということではなく、主イエスにあって望んでいます、と言っているように、主イエスへの信仰にある友情関係です。

<sup>20</sup> テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、だれもいません。

この「同じ心」が鍵になります。同じ思い、同じ心になりなさいと、パウロはピリピの人たちに勧めていましたが、テモテがピリピの人たちのことを心配しているということで、パウロと同じ心になっていました。けれども、ローマには他にピリピの人たちのことを真実に気にかけている人々がいませんでした。ピリピの人たちは苦しみを経ていました。けれども、キリスト者であってもそのことに無頓着であったのです。キリストの思いとはどういうものですか？それは、だれも目に留めていなかった、神殿の辺りにいた生まれつきの盲人を見ました。そして彼の目に泥をぬられて、シロアムの池に行って洗いなさいと言われました。神殿を礼拝する者たちの中に彼を加えるためです。この

ような思いをパウロは、キリストの思いを持っていたのでピリピの人たちに抱いていたし、同じように抱いていたのは、テモテだったのです。

同じ思いになる、一致するというのは、何か自分の思いを押し殺して、人に合わせることはありません。同調圧力に屈することではありません。これは全く、みこころにかなっていません。そうではなく、キリストの思いを抱いて、それで一つになっていくのです。だから、心動かされた人々が福音をもって人々に届こうとする、励まそうとするのです。

<sup>21</sup> みな自分自身のことを求めている、イエス・キリストのことを求めてはいません。

ここが、なぜ「同じ心」になれていないのかを示している、端的な言葉です。自分自身を求めているのです。それぞれが、しなければいけないことがあるでしょう。けれども、福音書には、イエス様はその日常の中で、非日常的な出来事に入って行かれることに満ちています。それが憐れんで行われる事なのです。もちろん、しなければいけないことはありますが、キリストの思いを抱く人は、優先順位を付けます。もちろん、しなければいけないことはするのですが、キリストによって行うことを優先して、信仰によって、これら必要なことが備えられているのです。

主は良い働きを私たちの間にすでに用意されています。そして、それを志の中に置かれます。それを従順の心をもって達成していきます。しかし、自分自身を求めているならば、いつまでもそれが妨げになっていて、それぞれがそれぞれのことを行っていることとなります。ばらばらなのです。ある人は商売に、ある人は遊びに、ある人は仕事に、ある人は家族のことです。もちろん、それぞれが大切なことです。けれども、それらをキリストにあって横に置く覚悟も必要です。

自分が自分のことを求めていることを知る一つのしるしは、空回りしていることでしょう。ハガイ書には、神の宮を再建する工事を中断してから、自分の家を建てていたり、商売をしていたりしても、天候がかんばしくなく不作で、実が結ばれていません。一度、自分の生活を点検してみてください。主の家をないがしろにして、自分の家を建てているとハガイは叱責したのです。それで彼らは悔い改めました。思いが一つになりました。主の家を建てる熱意に動かされました。

<sup>22</sup> しかし、テモテが適任であることは、あなたがたが知っています。子が父に仕えるように、テモテは私とともに福音のために奉仕してきました。

テモテは、パウロとバルナバの第一次宣教旅行の時におそらくは、信仰を持ったと思われます。母と祖母がユダヤ人で、彼を聖書によって教えていました。そこでパウロたちがやって来て、福音を聞き、信じたと思われます。第二次宣教旅行の時に、パウロとシラスがリステラを訪問すると、彼はキリストの弟子になっており、リステラとイコニオンで評判の良い人であったとあります(使徒

16:2)。すでにここにテモテの、靈的な素質を垣間見ます。

けれども、それだけではありません。テモテが「適任」であるとパウロが言っていますが、これは、幾度の試練があっても、いろいろな困難があっても、それでも、確かに忠実であることが明らかにされたという意味合いがあります。製品にする時に数々の検査を経ますね、それで製品化できますが、それと同じように、靈的な資格も、いろいろな場面で忠実であるかが試されるのです。

数多くの人が、口で奉仕は語ります。口で靈的なことは話します。自分はこれだけのことをしていますとか、あるいは、こんなことをしなければいけないとか、いろいろ言いますが、では、実を見せてくださいということなのです。ここでテモテの特徴は、「奉仕」でした。テモテはパウロと共に、仕えていました。他の人々は、自分自身のことを求めてパウロから離れても、テモテだけは離れませんでした。何か都合の良い時になると、やってきますが、自分の利益が中心なのです。テモテはそうではありませんでした。子が父に仕えるように、パウロの福音の働きに仕えてきました。

先ほど、私たちは目先のことを追い求めることを話しました。けれども、地道に主に仕えている人のことはあまり興味がありません。ウクライナ戦争のことは騒いでも、ウクライナでの宣教の働きは興味がありません。戦争が終わってほしいと祈っても、福音が彼らに広がっていくようにとは祈りません。北朝鮮からのミサイルについては関心を寄せますが、北朝鮮における過酷な迫害の中で礼拝を守る地下教会の人たちのために、共に祈る人は非常に少ないです。目立つことに目を留めますが、地道な、仕える働き、これこそが、仕えておられるキリストの王道なのですが、それに目を留める人は少ないのです。

けれども、よく考えてみてください。こんなことを聞いていた牧師さんがいました。人々が注目してきたニュースでの話題の人、去年は誰でしたか？5人挙げてください、と言います。去年は？一昨年は？もう誰だか分かりません。けれども、自分が苦しい時に共にいてくれた人を5人挙げて見ましょう。いつも友達でいてくれた人を5人あげてみましょう。いつも、祈ってくれていた人を2-3人あげてみましょう。そうすると、はっきりと覚えています。変わることなく、自分がどんな状況であっても一緒にいてくれた人々を私たちは覚えているのです。それが、先ほど見ました、世々に渡って星のように輝いている、ということです。

<sup>23</sup> ですから、私のことがどうなるのか分かり次第、すぐに彼を送りたいと望んでいます。<sup>24</sup> また、私自身も近いうちに行けると、主にあって確信しています。

パウロは、自分自身がすぐに行けるかどうかわからなかったので、テモテを送りますが、それはまさにパウロ自身が行くのと一緒ぐらいであるということです。パウロと同じように、テモテが行っても、ピリピの人たちにとって、同じような靈的励ましを受け、力を受けることができるということです。

奉仕者の心得の学びを、私たちの教会では行っていますが、そこでいつも話しているのは、「何ができるか？」ではなく、「いつも、いるか？」であります。主にお仕えしている時に、共にいるかどうか？であります。それで初めて、キリストにある思いが共有できます。そして、賜物が異なるので変わることは変わるのですが、だれが行っても、だれがやっても、主の働きを同じように見ることができる、ということです。

## 2B エパフロデイトにある慕う心 25-30

<sup>25</sup> 私は、私の兄弟、同労者、戦友であり、あなたがたの使者で、私の必要に仕えてくれたエパフロデイトを、あなたがたのところに送り返す必要があると考えました。

次にエパフロデイトです。彼がピリピからの贈り物をパウロのところに持ってきた人です。彼の名は、「魅力」というような名があるとありますが、元々は「アフロディテに属する」という意味です。アフロディテは、性と美の女神です。性欲の神です。ローマではウェヌス(ヴィーナス)、カナン人の、アシュタロテに匹敵します。つまり、エパフロデイトは、完全な異邦人、異教の背景を持った人であったということです。テモテが、父がギリシア人で母がユダヤ人というのとは違い、ユダヤ人やユダヤ教とは関わりのない異邦人でありました。

パウロは、彼のことを称賛しています。四つの表現をしていますね。まずは、「兄弟」です。交わりがあるということです。パウロとエパフロデイトの間には、キリストにあって同じ兄弟という交わりがまずありました。私たちは、どうでしょうか？いろいろな違い、背景がありますが、神の家族で、兄弟であり姉妹ですね。次に、「同労者」です。同じ福音の働きに携わっている人です。そして、「戦友」です。福音に堅く立てば、戦いがあることを私たちは1章で学びましたね。共に福音のために戦って、その労苦や傷を共に背負って、それで深く結びついている友は、みなさんにはいますか？そしてエパフロデイトをパウロは、「あなたがたの使者」と言っています。これは「使徒」と同じギリシア語がつかわれています。ピリピから遣わされた使者として、パウロは彼を深く敬っています。この彼がパウロの必要に仕えていたのですが、今、彼を送り返す必要を感じました。

<sup>26</sup> 彼はあなたがたみなを慕っており、自分が病気になったことがあなたがたに伝わったことを、気にしているからです。<sup>27</sup> 本当に、彼は死ぬほどの病気にかかりました。しかし、神は彼をあわれんでくださいました。彼だけでなく私もあわれんでくださり、悲しみに悲しみが重ならないようにしてくださいました。<sup>28</sup> そこで、私は大急ぎで彼を送ります。あなたがたが彼に再び会って喜び、私も心配が少なくなるためです。

エパフロデイトも、テモテと同じように、ピリピの人たちのことを気づかっている、それでキリストにあって思いを一つにしていたのです。本当は、彼はしばらくの間、パウロのところでその必要に仕えるために来たのだと思います。けれども、今、彼がとてもピリピの人たちを慕っているのを知って

いました。これは、彼がもしかしたら、ホームシックにちょっとかかっているのかもしれませんが。ピリピの教会が彼にとって自分の育った教会です。彼らのことが気になって仕方がなかったのでしょう。それでパウロは、早く彼を送り出そうと思ったのだと思います。

エパフロディトにとっては、罰の悪い思いをしていたかもしれません。贈り物を持っていくのに、彼自身が死ぬほどの病気にかかってしまったのです。それでパウロのところでは仕えるという目的が、きちんと果たせていないという思いがあったかもしれません。けれども、パウロは、その不十分なところは何一つ見ていません。むしろ、彼を兄弟、同労者、戦友、そして貴い使者だとみなしています。自分よりも、他者をすぐれたものとみなしなさいといった勧めを自分自身が実践したのです。

パウロは、神の憐れみを見ました。死んでしまったら、悲しみに悲しみが重なってしまいます。そうならなかったところに憐れみがありました。憐れみは大切ですね。私も聖地旅行で、どれほど経験したことでしょうか。コロナ禍になって、キャンセル料が 1 万円だけで済んだこと。ずっと最低人数の 15 名が集まらなかったのに、最後の最後になって 18 名にまでなったこと。しかも円安とインフレです。おまけにコロナはまだ収まっていません。他にもいろいろなハプニングがありましたが、それぞれの仲間が、主の憐れみを経験しました。

その中で、エパフロディトにとっても、ピリピの人にとっても、心配がなくなることが今、最適なのだとパウロは判断したのです。大急ぎで送ると言っています。

<sup>29</sup> ですから大きな喜びをもって、主にあつて彼を迎えてください。また、彼のような人たちを尊敬しなさい。<sup>30</sup> 彼はキリストの働きのために、死ぬばかりになりました。あなたがたが私に仕えることができなかつた分を果たすため、いのちの危険を冒したのです。

喜びだけでなく、尊敬を示しなさいと言っています。それは、彼は非常に仕える人であったために、かえって人の目につかなかつたということがあります。ものすごい忠実な働きをしているのに、いや小さなことに忠実であるから、かえって人の目に留まらないことがあります。彼は、だれにも知らない形で、キリストの働きのためにいのちの危険を冒したのです。だから、そういった人を尊敬する必要があります。キリストのからだは、弱く見える部分をことさらに尊ぶと、コリント第一 12 章で学びましたね。これを実践しないとイケないのです。

主の働きをしている多くの人が、知られないところで行っています。主に用いられている多くの人々が、無名です。私たちは、それらを当たり前だと思ってしまいます。空気のようにになっています。けれども、生きたキリストのからだとして、私たちは適切な尊敬を払うべきです。

カルバリーチャペル・コスタメサの教会で奉仕をしていた時に、どれだけの人たちが目に見えな

いところで奉仕しているかを知りました。掃除をしている人。朝早く来て、準備している人。駐車場で車の誘導をしている人々。教会学校で、子供たちの世話をしている人々。そして、礼拝が終わってから、心に悩みのある人々に祈っている人々。事務所で電話の対応をしている人々。多くの人が、説教壇に立っている牧者チャックがすばらしいという話をしていました。もちろんチャックは、みことばを取り次ぐ重要な奉仕をしていますが、けれども、私は違うところを見ていました。そうやって、目に見えぬところで、喜んで主に仕えている人々が輝いて見えました。そういった方々をしつかりと尊敬しなさいということなのです。当たり前にはいけないのです。キリストのからだは、弱く見える部分をことさらに尊ぶのです。そのようにして、思いが一つになっていきます。

Paul is not asking us to “reach for the stars,” though the higher the goal the more we ought to achieve. Rather, he is setting before us the divine *pattern* for the submissive mind and the divine *power* to accomplish what God has commanded. “It is God which worketh in you” (Phil. 2:13). It is not by imitation, but by incarnation—“Christ liveth in me” (Gal. 2:20). The Christian life is not a series of ups and downs. It is rather a process of “ins and outs.” God works *in*, and we work *out*. We cultivate the submissive mind by responding to the divine provisions God makes available to us.<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> Wiersbe, W. W. (1996). [\*The Bible exposition commentary\*](#) (Vol. 2, p. 77). Victor Books.